

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2025

Autumn

南極クルーズ
大自然との呼応

水先案内人が語る

ピースボートクルーズの魅力

第二特集

[発行] (株) ジャパングレイス

南極クルーズ 大自然との呼応

南極

THE WORLD'S WILDEST PLACES
ANTARCTICA

壮大な山々と美しい氷の世界が広がる神秘の大陸、南極。どこまでも続く青と白が織りなす絶景はここでしか見ることができません。Voyage119でピースボートは8年ぶりの南極遊覧となりましたが、世界で最も美しい手つかずの自然の姿に、参加者は大いに感動しました。南極がいつまでも南極であり続けるために、私たちは何ができるでしょうか。



GLOBAL VOYAGE
2025 Autumn

CONTENTS

特集

南極クルーズ

大自然との呼応 P3

南極クルーズ 新たな感動

大自然から学び、大自然のために行動する P4

エクスペディション・リーダーと

南極を知り、理解を深める P6

感動の南極遊覧、

人工物のない圧倒的な自然美 P7

「南極アンバサダー」に

任命された600人 P8

SDGsユースプログラムを実施 P9

第二特集

水先案内人が語る

ピースボートクルーズの魅力 P10

寄港地に行く

スリランカ コロンボ P14

PEACE BOAT NEWS P16

PEACE BOAT ACTIVITIES P18

表紙の写真

デッキから数百万年の歳月をかけてつくられた氷山の圧倒的な自然美を望む。





Voyage119の航路図。※南極遊覧は、天候や氷の状態などにより、航路が変わることがあります。



専門家の案内でより魅力が深まる。



2024年12月に出航したVoyage119ではピースボートクルーズで8年ぶりとなる南極遊覧を実施しました。世界一周の旅も後半に入る2025年2月、南米のウシュアイアを出港したパシフィック・ワールド号はビーグル水道を進んでドレーク海峡へ。そして、南極半島の玄関口であるサウスシェトランド諸島に到達します。3つの島を巡った後はいよいよ南極半島へ。雪に覆われ

た絶壁。標高2000m以上の山々がそびえる絶景。自然美の極致とも言える氷山。そしてクジラ、ペンギンなど野生動物たちとの出会い。参加者はデッキから、目に入ってくる景色にときおり歓声を上げながら、地球最後の秘境と呼ばれる南極を満喫しました。今号の特集ではVoyage119における南極遊覧の様子と、ピースボートならではのこの遊覧に関する取り組みについてご紹介します。

THE WORLD'S WILDEST PLACES
ANTARCTICA

南極クルーズ 新たな感動 大自然から学び、 大自然のために行動する

Voyage119の南極遊覧においては、南極旅行を管轄する国際機関から環境への意識、行動ともに高い評価を獲得。美しい自然に感動するとともに、そこから学び、行動に移すピースボートの姿勢を改めて認識する機会になりました。



海風が吹き込まない穏やかな湾のなか、じっくりと南極遊覧を満喫できる。



独特の青色をした巨大な氷の造形の美しさに圧倒される。

エクスペディション・リーダーと南極を知り、理解を深める

南極遊覧に入る前に、洋上では多様なレクチャーが開催されました。南極遊覧クルーズの責任者（エクスペディション・リーダー）を務めるスーザン・エイデイさんは数十年にわたりエクスペディション・リーダーとして働き140回以上の北極、南極ツアーを指揮してきた経験を持っています。彼女は南極条約の内容や南極のクジラやペンギン、海鳥などの生態についてとても興味深い話を披露してくれました。講演会場が満員になるほど集まった参加者は熱心に耳を傾けました。

また地質学者のキース・マウンテン博士は南極の地質と環境、氷と氷河の成り立ちや気候変動の影響について

て、歴史専門家のグレン・スタイン氏が過去の南極探検隊の足跡や調査成果などを講演し、参加者はよりいっそう南極への関心と理解を深めることができました。

そしてパシフィック・ワールド号はいよいよ南極半島へ。澄み渡る空気のなか、船はゆっくりと進んでいきます。船内では水先案内人の写真家水本俊也さんによる南極の魅力について語る講座が開かれ、また同時に珠玉の写真の数々が展示された南極写真展も開催されました。静寂に包まれた神秘の場所、どのような景色に出会えるかますます期待が高まっています。



スーザンさんによって、南極の野生動物の生態などについてレクチャーが行われた。

感動の南極遊覧、人工物のない圧倒的な自然美

南極遊覧は初日から、見事な快晴に恵まれました。デッキには多くの乗船者が集まり、巨大な氷山が浮かぶ姿を見つ

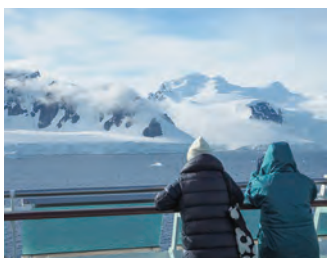
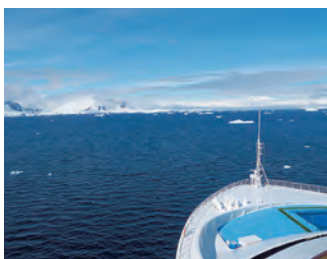


この遊覧では船だからこそ出会える風景があり、デッキに立っていると時間が経つのを忘れるほど。またパシフィック・ワールド号は船の先頭に移動することができ「地球の果てに向かっていく感覚」で景色を堪能することもできます。「想像を超える絶景」「凄いとしか言いようがない」という感想も聞くことができました。文明から離れた、地球の原風景ともいえる姿。どこまでも続く白と青の世界に魅了された6日間でした。



人工物が一つもない、太古の地球がそのままの姿で目前に現われる。

めていました。その圧倒的なスケールは言葉を失うほどです。ルメール海峡では左右にそびえ立つ氷壁が迫り、穏やかにキラキラ輝く海面にその姿が鏡のように映り込みます。「こんなに静かで美しい場所が存在するなんて」と感嘆の声が上がったほどです。パラダイス湾ではペンギンの姿が確認され、時おりクジラも現れるなど、野生動物のおもてなしを受けました。ノイマイヤー海峡では、氷山の隙間を縫うように船が進み、甲板に立つと風に乗って聞こえる氷のきしむ音が耳に残ります。



南極遊覧では、穏やかな自然港「パラダイス湾」で雪に覆われた山々や氷の絶壁、様々な形の氷山を見ることができる。ルメール海峡では切り立つ岩山がそびえている。またクジラ、ペンギンなどの動物が生息し、その姿を見るのも感動体験だ。

海堂尊さんが乗船されました

TOPICS



海堂尊 (医師・作家)

1961年千葉生まれ。1988年千葉大学医学部卒業。1993年千葉大学医学部大学院修了。福井県立大学客員教授。2006年『チーム・パチスタの栄光』で第4回「このミステリーがすごい!大賞」を受賞し、作家デビュー。小説は同一世界観で統一され、「桜サガ」とよばれる。医師として死因究明問題にコミットし、AI (オートプシー・イメージング=死亡時画像診断) の概念を提唱、社会導入を進める。『ブラックペアン1988』『プレイズメス1990』『スリジェンター1991』のバブル三部作は累計160万部の大ヒットとなっている。近著に『コロナ漂流録』『ひかりの剣1988』、最新刊に『蘭医繚乱洪庵と泰然』。

特別寄稿

南極の蒼 ANTARCTICA BLUE



特別寄稿はこちら▶

ピースボート8年ぶりの南極航路世界一周に同行した海堂尊さんに、南極遊覧について寄稿いただきました。海堂さんにとっても初めての南極体験となりました。作家の視点から見て、感じた南極の魅力をぜひ一読ください。



ピースボートはSDGsの公式キャンペーン船として世界の港でその重要性を発信し続けています。クルーズではSDGsに取り組む若者が乗船し、

SDGsユースプログラムを実施

海洋汚染や気候変動などについて意見交換を行い、それぞれコミュニティで実践していくための方法を考えるSDGsユースプログラムを展開しています。Voyage119でも世界各国での若者のリーダーを迎え、ワークシoppなどを実施しました。今回は美しい南極を旅しながらも、ここ10数年の間に気候変動や温暖化の影響で、雪が溶けている岩肌を見たり、氷河の崩落を目撃したり、雪が減少している実態を把握することができました。こうした「リアルな体験」をもとに、南極の環境問題についても活発な議論が交わされました。



Voyage119のSDGsユースプログラムはよりリアルな体験をもとに意見が交わされた。



南極で見られる鮮やかな青色をした氷。息を呑むその青さは氷の中に数万年も閉じ込められていた空気によるもので、地球の神秘に思いを馳せた方も多くいらつしたようです。こうした感動を味わうと同時に、南極の成り立ちや歴史を知り、直面している環境問題を学び、それを行動へとつなげていく、その最後のピースが「南極アンバサダー」です。

「南極アンバサダー」に任命された600人

これは南極で得た感動や、貴重な地球の財産への自身の気持ちなどを広く伝え、環境保全のために一人ひとりが具体的なアクションを起こすことを目的とした取り組みです。たとえば下船後の日常生活で、水の使用量を減らす、プラスチック製品の使用を控える、といった24のチャレンジに前向きに取り組んでいくことを前提に、南極保護に関して自身ができることを

今後も続けていくと表明をした参加者に、公式のアンバサダー証明書が授与されました。今回のクルーズではこの制度に賛同した申込者はなんと約600人を数えました。圧倒的な自然美をみせる南極ではありますが、地球温暖化の影響は大きく、氷床や海水の減少を加速させています。陸上では、土壌や植生が露出する場所が見られるなど、南極の生態系に大きな変化が起き、また、近年では鳥インフルエンザの蔓延も新たな脅威と

なっています。Voyage119では講演やワークショップなどを通して得た学びをもとに「自分に何ができるか」考え行動する参加者が多く、南極の環境に影響を及ぼさないためのレギュレーションの順守などにも、大きな理解と協力を得ることができました。結果として今回の南極遊覧は、国際南極旅行業協会(I A A T O)のオブザーバーから驚嘆と称賛を寄せられるものとなりました。



多くの人が「南極アンバサダー」に名乗り出た。

水先案内人が語る ピースボートクルーズの魅力

Voyage 120に水先案内人として乗船し、講演やコンサートのほか、ホワイトハンドコーラスのワークショップを主催された「コロんえりかさん」。「音」にとらわれず、手や顔の表情、全身を使って音楽を表現するホワイトハンドコーラスは、船内で大好評を博しました。初乗船となったコロんえりかさんに、ピースボートクルーズの魅力やホワイトハンドコーラスの活動などについて話を伺いました。

コロんさんはVoyage 120が初めての乗船となりましたが、どのような感想をもたれましたか。

感想がたくさんあって、どこから話したらよいか分からないくらい(笑)。ピースボートには昔から憧れをもっていたのでお誘いいただいたときはとても嬉しかったです。まず思い浮かぶ感想は、乗船前と乗船後ではイメージが変わったことでしょうか。当初は世界中のいろいろな国を訪れて、素晴らしい体験を思い出もつくって、というイメージをもっていました。皆さんの話を聞くときと違っていて、若い方もご年配の方も口を揃えて「一番大事な

宝ものは人とのつながりです」とおっしゃっていましたね。世代も国も文化も超えてつながっていく人間の力、というものを感じて、世界一周そのものももちろん楽しいものですが、宝ものはここに集まってくる人たちなんだな、という感想をもちました。

コロんさんご自身も出会いやつながりを実感されましたか。

乗船中、私はたくさんの人とお話しました。たとえば夕食を終えて、若い方々と夜中まで話し込んだりしました。また、人生の先輩と朝の五時にお会いする約束をしてご自身の体験や

ピースボートの船旅の楽しさは、ほかにどんな場面で感じられましたか。

朝のデッキで、朝日をたっぷり浴びながらのラジオ体操は、本当に爽快で気持ちのいい、最高のひとときでした。私はこれまであまり体操をしていませんでしたが、今ではラジオ体操がすっかり日課になっています(笑)。航行中にイルカの大群に出会ったのも感動的でした。この海の中には陸地よりも大きな世界が広がっているというのことに思いを巡らせました。またパシフィック・ワールド号のスタッフのホスピタリティも素晴らしかったですね。食事もととても美味しかったですし、船内のどこで過ごしていても快適でした。

船旅の魅力はどんなところにありとお考えですか。

日常生活と隔絶したところで「生まれ変わる」という点ではないでしょうか。インターネットも使用できませんが、いつものように電話がかかってくるわけではないし、自分と向き合う時



船内での講座やワークショップは、参加者の熱気で大盛況。



船上に響き渡るソプラノの歌声。息をのむほど美しい歌声に、会場は感動の渦に包まれた。

間が多くなるので、普段はなかなかもつことができない静かな時間を手に入れることだと思います。

船内生活ではどんなことが印象に残っていますか。

私が水先案内人として携わったアクティビティはもちろん印象に残っているのですが、船上で開催された企画「洋上国際会議」と、その後に行われ

歩んでこられた人生についてお話を聞いたり、多くの人に声をかけていただいて、ありがたかったですし、とても楽しかったです。またワークショップに参加してくださった方は140人ほどいらっしゃいましたが、皆さんとの絆もできて現在もつながりをもっています。こんな船旅はほかにはないと思います。



た、被爆者の方の被爆証言には、とても大きな衝撃を受け、戦争と平和について考えさせられました。また参加者によるデイスカッションもピースボートらしさを感じました。世代、国籍、立場を超えて本音で語りあう。たとえば、中国の方と日本の方が、それぞれの国で学んだ歴史観の

違いについて話し合っていたり、長年平和活動に携わってきた方に、若い方が「今なお戦争や紛争が止まない世界で、これからどのような活動をすべきか」と質問していたり。ピースボートの理念が体現され、受け継がれている現場を見たようで感動しました。



COLON Erika コロん えりか
(ソプラノ歌手、ホワイトハンドコーラスNIPPON芸術監督)

ベネズエラ生まれ。聖心女子大学、大学院で教育学を学んだ後、英国王立音楽院声楽科修士課程を優秀賞で卒業。2019年東京国際声楽コンクールにてグランプリ・歌曲両部門で優勝。国内外で演奏活動を行う。キングレコードより「BRIDGE」をリリース。イタリア、フランス、イギリスでの音楽祭出演、国内外で演奏活動が続けながら、ホワイトハンドコーラスNIPPONの芸術監督として、視覚・聴覚など障害のある子どもたちに音楽を教えている。音楽による社会インクルージョンを目指した活動は2024年にバリアフリーの国際賞ゼロ・プロジェクトアワードを受賞。国際学会での発表や講演も精力的に行っている。4児の母。



コロンさんの普段の活動について
ご紹介ください。

私はベネズエラで生まれ日本で育ちました。ソプラノ歌手として活動している一方で、一般社団法人エルシステマ・コネク트가運営している「ホワイトハンドコーラスNIPPON」の芸術監督を務めています。Voyage 120では私の音楽人生についての講演やホワイトハンドコーラスのワークショップを行いました。ホワイトハンドコーラスとは、すべての子どもに開かれたインクルーシブな合唱団。ろう者、難聴、全盲、弱視、車いすユーザーを含むメンバーが、声と手話、身体で新しい音楽のカタチをつくっています。白い手袋は「目で見る音楽」をつくる楽器です。ホワ



ピースボートの船上での
ワークショップはいかがでしたか。

日本の方をはじめ、中国、台湾、韓国ほかアジアの方に大勢参加いただき、とてもグローバルでさまざまな国の人と一緒に音楽を楽しめてとても幸せでした。ワークショップは2回でしたが、皆さんから「ぜひ披露したい」という声が上がって、洋上国際会議の最後に、パフォーマンスさせてもらいました。100人くらいで舞台上上がり、言葉を超えて音楽でつながった希望のエネルギーあふれるホワイトハンドコーラスでした。

これからの活動の
抱負をお願いします。

私は、1983年にピースボートの皆さんが世界へ船を出して、国際交流から平和をつつていく活動を始めたことに尊敬の気持ちをもっています。壁があったとき、そこを避けるのではなく乗り越えていかなければならないと思うんです。その向こうに素晴らし

トハンドコーラスNIPPONは国内外での公演を通して、インクルーシブ（包括的）な未来を発信しています。

コロンさんはなぜ
ホワイトハンドコーラスの活動に
取り組むようになったのですか。

私は、惜越ながらホワイトハンドコーラスとピースボートは目指すところが同じだと思っています。私は音楽家として世界中を回り、多くの人と出会ってきました。私にとって音楽は船のようなのですが、かつて忙しい日々を送るなかでこの船の行く先はどこなのか、すごく悩んだときがありました。私らしく船を動かしていきたいと考えていたとき、出会ったのがホワイトハンドコーラスでした。壁を乗り越えていく音楽の力に共感し、この活動に取り組むようになりました。「障害は社会がつくるもの」とする障害者権利条約の考え方において、私たちは音楽教育や芸術創造の「障害」を取り除きたいと思っています。本当は壁はないし、枠を超えた新しい創造は、対話から生まれると思っています、それが私たちにとつての平和への一つのコメントメントです。

い出会いがあると思うし、ホワイトハンドコーラスもピースボートの皆さんに負けないように、社会にあるいろいろな思い込みの壁を乗り越えていく活動をしていきたいと思っています。

最後にこれから乗船予定の方々へ
メッセージをお願いします。

人生には多くのチャンスがあり、そのきっかけは誰にでも訪れるかもしれません。ただ、チャンスを掴めるかどうか



ホワイトハンドコーラスNIPPON

<https://elsistemaconnect.or.jp/activity/whc-nippon/index.html>



1: 活気あふれる街中のワンシーン。2: 高層ビル群と旧市街区の建物群が混在するコロンボ。3: ガンガラマ寺院の本堂を囲むように金色に輝く仏像が並ぶ。4: ペイラ湖上に建つシーマ・マラカ。5: スリランカを多面的に学ぶことができるコロンボ国立博物館。6: コロンボの中心部にあるペイラ湖は都会のオアシス。



寄港地 を行く

クルーズ
＜Preview＞



スリランカ民主主義共和国



ツアーで楽しむスリランカ

オプションツアーやオーバーランドツアーを選ぶのも、旅の楽しさを広げる選択肢のひとつ。詳しくはガイドブックをチェック。



かつてアラブ商人たちの中継貿易港として栄えた「ゴール旧市街」へ。世界遺産の要塞は必見だ。



オーバーランドツアーで世界遺産「シーギリヤ・ロック」へ。ジャングルに囲まれた巨岩の上に宮殿跡が広がる。

コロンボの歴史を深く知るにはコロンボ国立博物館へ。1877年、当時の英国のセイロン総督だったウィリアム・グレゴリーによって建てられ、仏像や古代王朝の宝飾品など、スリランカの美意識を垣間見る展示が並びます。食事はぜひ名物のカレーをどうぞ。1日3食カレーを食べるこの国では、ホテルやレストランでは本格的なスリランカプレートが提供され、スパイスの香りに包まれた本場の味を楽しめます。食後はセイロンティーを片手に、海風に吹かれながらの一服もおすすめ。お土産にも紅茶は人気で、お得な価格で手に入ります。コロンボの人は穏やかでやさしいため、お店や街中でのふれあいも旅の思い出に残るでしょう。



アテネの神殿を思わせる荘厳な建物の旧国会議事堂。

スリランカ コロンボ COLOMBO

インド洋に浮かぶ「光り輝く島」スリランカ。その最大都市コロンボはかつてスパイスや紅茶の交易拠点として栄え、現代では経済発展を遂げ、スリランカの玄関口として多彩な表情をもっています。英国統治時代の名残とトロピカルな空気が交錯するこの街は、歩くだけで異国情緒を五感で楽しめます。

紅茶と宝石の国・スリランカのかつての首都コロンボ。街に足を踏み入れると、近代的なロータスタワーや高層ホテル群の背後に、コロニアル様式の旧国会議事堂や赤レンガの旧市街ベター地区が広がっています。海辺に広がる「ゴール・フェイス・グリーン」では、地元の人々が散歩したり屋台で軽食を楽しんだり、穏やかな日常に触れられる場所。街を歩くと、静寂に包まれたシーマ・マラカ寺院やキャリニヤ寺院など、仏教国家スリランカならではの多くの寺院が目に入ってきます。



名産の紅茶はお土産として人気。



さすがに本場、カレーのバリエーションは豊富。



カラフルな花を揃えた花屋さんが目立つ。



寺院の一角で見かけた風景。

関西万博・国連パビリオン 共催イベント

8月10日、ピースボートは2025年大阪・関西万博の国連パビリオンの共催で「TIME FOR PEACE」レセプションを開催しました。この特別イベントは、第二次世界大戦の終結および国際連合創設から80年という節目を記念するもので、また万博の「平和と人権テーマウィーク」の一環として行われました。会場は、大阪港に停泊中のパシフィック・ワールド号の船内。平和、人間の安全保障、および尊厳の促進に取り組む国内外の関係者が集い、対話と交流を深める貴重な機会となりました。



イベントには60を超える国と地域をはじめ国連機関、市民社会団体、地域コミュニティ、そして国際的なパートナーの代表者など650名以上が出席。共に声を上げ、人々をつなぎ、平和構築と持続可能性への共通のコミットメントを強化しました。

冒頭、共催者であるピースボート共同代表の吉岡達也と、国連事務次長補兼2025年大阪・関西万博国連陳列区域代表のマーヘル・ナセルさんが挨拶を行い、「人類は団結したとき最も強くなる。平和のために立ち上がる、それが私たちの永遠のモットーです」と語りかけました。



マーヘル・ナセルさん

続いて登壇したのは2025年日本国際博覧会協会副会長のウスビ・サコさん、国連事務次長兼軍縮担当上級代表の中満泉さん。そして、日本赤十字社ウクライナ現地代表部首席代表の芳原みなみさん、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の事務局長メリッサ・パークさんと日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員の田中熙巳さん。参加者は力強いメッセージに耳を傾け、今なお戦火にさらされているウクライナ、ガザ、スーダンへの連帯のための対話を重ね、報道されていない紛争地域の平和、安全、尊厳、人権保障のために団結し行動していくことを確認しました。

了し、グローバルボーイズグループJO1はエネルギッシュなパフォーマンスで会場の雰囲気を一気に高揚させました。

一部終了後には、ネットワーク・レセプションの参加者に向けて国連ユース担当事務次長補のフェリペ・ポーリエさんがメッセージを送りました。そして最後を締めくくったのは、REDCLIFF for Peace（今こそ平和を）をテーマに、光と動きで時の流れ、人間の

精神の忍耐強さ、そしてより良い未来へ向けて共に歩む希望を、大阪の夜空に表現しました。

国連パビリオンをはじめ、この特別イベントに関わってくださったすべての皆さま、そして参加してくださった方々に、心より感謝すると同時に、平和は単なる理想ではなく、すべての人にとつての権利であり、それは毎日、守り、育み、築いていくべきものであるということを改めて確信したひとときになりました。

このほかイベントでは文化の架け橋となり、共感を生み出すパフォーマンスも披露されました。ユネスコ平和芸術家であり、世界的に活躍するバイオリニストの二村英仁さんは息をのむような演奏で魅



中満泉さん



ウスビ・サコさん



與那城奨さん



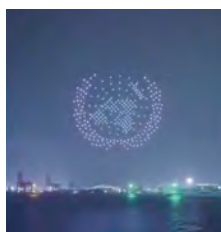
二村英仁さん



JO1のエネルギッシュなパフォーマンス。



フェリペ・ポーリエさん



平和への願いが、ドローンショーによって大阪の夜空に描かれました。



ひとり親家庭と 被災地を支える「港」 FOOBOUR（フーバー）

「いつでもどこでも食の支援を」をテーマに、キッチンカーを活用して子どもたちへ、そして災害時には被災地へ支援をお届けします。食品を受け取ることができる「港」となることを目指して。そんな想いで、Food(食事)と+Harbour(港)を組み合わせ「FOOBOUR」と名づけました。2023年よりスタートし今年度には7台に増台予定です。今後は100台体制を目指し、さらに支援の場を広げていきます。



PBV ピースボート
災害支援センター
【オフィシャルサイト】 <https://pbv.or.jp/>

能登半島地震や九州豪雨で活躍しているFOOBOUR

PBVはこれまで国内外で様々な被災地支援を実施してきました。2024年1月1日に発生した石川県能登半島地震の際にも、翌日には先遣スタッフが現地入りし1月5日にはキッチンカー「FOOBOUR（フーバー）」の運用を開始。炊き出しや物資配布等を実施しました。

災害時には、道路寸断や断水などの影響で食料調達が困難になることがあります。また避難所で配布される菓子パンやおにぎりなどの冷たい食事が続くと温かい食事の提供はとても喜

ばれます。石川県珠洲市大谷地区は、

発災当初土砂崩れなどで孤立しその後も支援が届きにくい地域でした。そこでPBVは、2024年4月から大谷地区で支援物資配布を実施。5月からは並行してFOOBOURを常設し被災者の方々が24時間いつでも食料品・日用品が受け取ることのできる体制を整えました。



2025年8月の九州豪雨においてもPBVは発災翌日に先遣隊を派遣し、継続して物資支援、食事支援、家屋対応などを行っています。断水が続いていた鹿児島県始良市の地域の方々へ温かい食事を届けるためにFOOBOURによる炊き出しを実施。受け取った多くの方々から感謝の言葉をいただきました。

PBVでは被災地支援が可能な災害対応キッチンカー、FOOBOURを全国に100台配置できるよう、その普及を進めています。

支援を必要とする人がいつでも食品を手にとることができるように

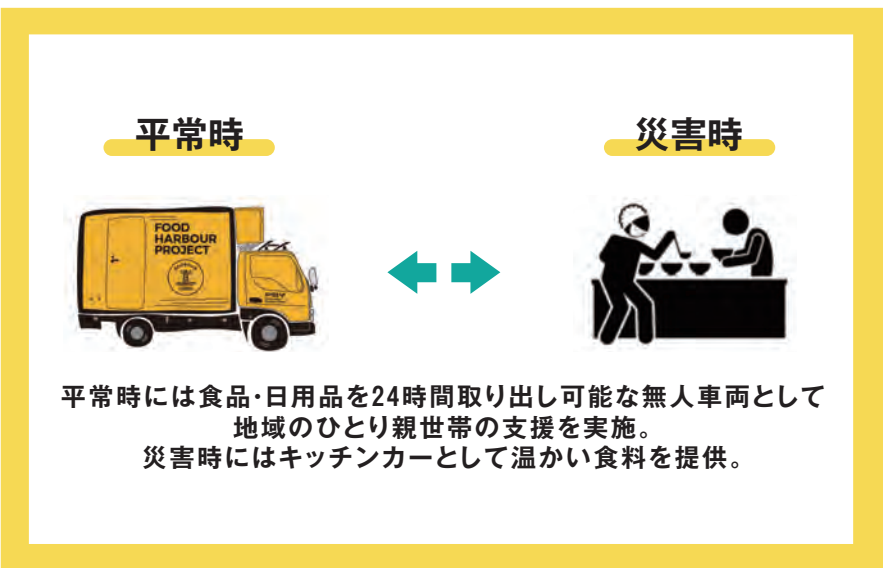
FOOBOURは、PBVが2023年に立ち上げた新しいプロジェクトです。支援の対象は生活に困難を抱えるひとり親家庭、そして災害が発生した際の被災者支援です。

「いつも（平常時）」と「もしも（災害時）」を切れ目なく、「食と栄養」に関する課題解決を目指しています。

平常時にFOOBOURを利用する家庭は登録制です。付与された電子ロックの合鍵を使用し、キッチンカーの鍵を

ご自身で解錠して、中に入るができます。無人運営しているため人目を気にせず24時間利用が可能です。

また、品物はオンラインのデータベースで在庫管理しています。防犯カメラも設置しており、安心安全に利用できます。現在、佐賀県大町町と石川県輪島市にキッチンカーを配備しています。より多くの地域に置くことで支援の輪を広げ、全国への展開に向けて力を入れています。FOOBOURで提供する食品や、日用品などは皆さまのご支援によって成り立っています。今後も多くの方のご支援をお願いいたします。



ふるさと納税で困窮するひとり親家庭の子どもに支援を



佐賀県のふるさと納税でFOOBOURをご支援いただけます。返礼品として佐賀の特産品をご用意しております。お寄せいただいたご支援は、平常時の「ひとり親家庭の子ども支援」と災害時の「被災者支援」に有効に活用いたします。

また、継続的にFOOBOURプロジェクトを応援いただける「FOOBOURサポーター」を新設しました。月額1,000円～ご支援が可能です、いつでも簡単に退会も可能です。

詳しくはこちら



被災者の方々が24時間いつでも食料品・日用品を受け取ることができます。



鹿児島県始良市で断水が続いていた地域の方々に炊き出しを実施。

船上百景 [ナプキンアート]



クルーが折り方や立体的に見せるコツなどを丁寧に指導してくれます。

小さな布から芸術作品と 笑顔が生まれます

いつもレストランの入口に飾られている、美しく折られたナプキンアート。「キレイね」「素敵だね」と、装飾を楽しみにしている方も少なくありません。そのナプキンアートにチャレンジしましょう。毎回、体験教室が開催されています。本船のクルー（乗組員）が講師となり、参加者に花や動物、ハートなど、さまざまなナプキン折りを教えてくれる人気プログラムです。参加者はほとんど初めてですが、折り紙感覚で楽しむことができ、分かりやすく教えてくれるクルーのガイドに沿って、短時間で素敵な立体的作品ができあがります。完成した作品を写真に撮ったり、ディナーの席で使ってみたりと、旅の楽しみが広がります。また作品を通じて自然と会話が生まれ、初対面の参加者が友だちになれるのも魅力です。



シンプルな布から芸術作品が誕生。



自分の作品ができると喜びもひとしお。



絶望のとなりに
だれかがそっと腰かけた
絶望は
となりの人にきいた
あなたはいったい誰ですか
となりのひとはほえんだ
わたしの名前は希望です

これは、アンパンマンの作者、やなせたかしさんの『絶望のとなりに』という詩です。

今号でインタビューをご協力いただいた、水先案内人のコロンえりかさん。彼女の父エリック・コロンさんが作曲した『被爆のマリアに捧げる賛歌』は、2001年の9・11直後、悲しみが世界を覆う中で長崎の浦上天主堂にて初演されました。その時、えりかさんが歌声に込めたのは、絶望や恨みではなく「希望」だったそうです。

やなせさんの詩や、えりかさんの歌声がそうであるように、私たちの船旅もまた、希望という名の旋律を奏でる場所だと思えます。新しい場所へ踏み出すこと、初めて出会う人と語り合うこと。それは、自身の心の中に、まだ見ぬ希望のハーモニーを生み出す第一歩となるはずです。

世界一周の航海中、皆さまは幾度となくデッキに立ち大海原を眺めることでしょう。そのとき隣にいる方へ話しかけてみてください。新たな出会いという「希望」がほほえんでくれることでしょう。（井上編集部）